

〔書 評〕

## 編集室ふたりから &amp; ひとり九条の会

(編集・発行 金住典子／

編集協力 原田奈翁雄)

『ひとりから——対等なまなざしの

世界をめざして』

——第55号 (2014年6月)——

池 野 重 男

## I 国方勲氏との出会い

雑誌『ひとりから』について紹介するためには、まず、私が同誌に出会うことになった経緯を語らなければならない。もう五年以上も前になるが、私は、国方勲氏に同氏の長年にわたる具体的な教育実践と今日の教育のありようへの思いなどをテーマに、学外講師という形で私の講義（保険論）と演習でお話をお願いした。そして、その後も、国方氏が発行されている「国方きょうだい新聞」（氏のきょうだい間のやりとりを通信形式にしたもの）や「はがき通信」などを送ってもらっていたが、そのなかに三年前に氏を書かれた小冊子「はぐの教育論——学校とは何か」があった。それは、氏によれば「卒業生約三百人に送った冊子です。当時の大阪府知事橋下氏……率いる大阪維新の会の教育施策を批判したものである（引用は掲載誌『ひとりから』p. 161 以下同じ）。

国方氏が「大阪市のO中学から……教師となって九年目、三十一歳のとき」「強制配転させられ」た時に会った「忘れられない人」との出会いから話は始まる——「外へととばされた理由ははぐの生徒指導がO中学の校風に合わないということでした。大阪きっての名門校で成績優秀者は大事にします。しかし、どんな生徒にも平等に勉強の力をつけたいと思って、班学習や遅れがちな生徒に居残り学習をさせたりしていたはぐは、O中学の校長、教頭や運営委員会の教師にとっては違和感のある目ざわりな存在だったようで……露骨ないじめを受けるようになり、二年半たった夏休みの最終日に開かれた臨時職員会議で突然の転出を言い渡されました。」（p. 163）

国方氏が「忘れられない人」というのは、この時にただひとり、「『こ、この人事は自分たちの気に入らないものを追い出すために、お、おまえらが市教委といっしょに仕組んだ茶番やないか！ おかしいじゃないか。すぐに取り消せ！』と、ものすごい形相で校長ら

に怒鳴って睨みつけて……殴りかからんばかりの怒りがあふれていました」という、「美術科の大中先生、テニス部の顧問」。(p. 164) この大中先生のエピソードがいくつか書かれているが、その中から二つを抜き出してみよう――

授業中、生徒に絵を描かせながら自分は釣り竿を削っていることもあったようです。不真面目でけしからんと思いますか？ たしかに大まかな人ではありましたが、指導はいい加減ではなく、生徒の描く作品には独創的なものが次々現れました。……

「国方さんは熱心に〔女子バレーボール〕クラブを指導してはるけど、ぼくなんかは晩にビールをおいしく飲むためにラケットを振って汗を流しているんです。第一、テニス部の生徒を試合に連れていったことがない。教師としても顧問としてもぼくは失格で、人としても最低の人間なのです」と言っていました。

校庭で野球部が練習中に突然、アロハシャツにつっかけという格好の先輩が現われ、勝手にノックを始めてミスをした部員たちを次々に殴りつけていたことがあります。横にいた野球部の顧問は黙って見ている。見かねたぼくが寄って行って「生徒に手を出すのはやめろ！」と注意した。先輩は「なにに！」とぼくに殴りかかってきました。そこへ大中先生がダッシュで駆け付けて先輩を羽交い絞めにし「二度と来るな！」と校門外に追い出したのでした。 p. 165

こうした具体的な国方氏の教師<sup>1)</sup>としての学校体験が綴られるなかから「自由でおおらかな学校の雰囲気」が提示され、それゆえに「ただ上の人間の言うことを聞いておけと言うばかり」・「イエスマンの教師ばかりが増えていくことになる」(p. 166) 現在が対照的に映し出されることになる。

だからこそ、国方氏は、「子どもはときにつまずいたり、迷ったり、悩んだりしつつ、やがてはしっかりと成長していきます。おおらかに息長くその成長を見守ってやらねばならないのです。教育は、目に見えてすぐに成果が出るようなものではない。」(p. 174) と訴え、「卒業生のみなさんにぜひ考えていただきたくペンをとった次第です。(2011・8・15)」と、その文を終えている。

## Ⅱ 雑誌『ひとりから』との出会い

前節で紹介した国方勲「ぼくのエデュケーション」とともに、『ひとりから——対等なまなざしの

1) じつは、国方氏は、「退職後も教師という仕事との縁が続いていて交野市にある国立の女子少年院で収容されている女子中学生に英語を（週1回）教えに行っています。もう14年になります。／腕や手首に自分でつけたタトゥの跡が残っている子どもたちですが、一般の生徒と少しも変わりません。中一ぐらいから学校へ行かなくなって悪の道に迷い込み、すべて鍵のかかる施設で不自由な生活をしている彼女たちは、必死になって自分を変えようと努力しています。ぼくは十二分に準備をし、心をこめて授業に臨みます。」(p. 166)

世界をめざして』には、「大学生は考える——大阪経済大生たちの体験的意見 『ほくろの教育論』を読んで134人の意見から43人の要約（2012年9月）」が掲載されている。

この「意見要約」というのは、じつは、私が、国方氏から送られてきた小冊子「ほくろの教育論」を印刷して学生たちに配布し、これを書いた人（＝国方勲氏）にそのお礼としてみんなの感想を送りたいので各自の教育体験などを踏まえて書いてほしい、と頼んだのである。そして、それに応えてくれた学生たちのレポートを、「これらは私が目を通して、こちらでの整理は終了していますので返却は無用です。国方さんの参考になれば幸いです」と、私が国方氏に送ったものである。その学生たちのレポートを国方さんが、雑誌に掲載されているように《教育条例に賛成の意見から》（pp. 176～178）と《教育条例に批判的あるいは反対の意見から》（pp. 178～184）にそれぞれ分類整理して要約されたのである。

そこで、さっそく今回も春学期の講義（現代経営入門Ⅰと保険論Ⅰ）と演習で学生たちに、雑誌掲載の国方氏の文章と学生たちの数年先輩の声をコピーして配布した。今回も学生たちからのレポートを、お礼として国方氏に送りたい。

ところで、国方氏は雑誌を送付した人たち（私もその一人なのだが）に宛てて挨拶文を挟み込んでおられる。ここでそれを全文そのまま紹介しておきたい。というのは、この文章が、じつは、雑誌を詳しく紹介するにはうってつけのように思えるし、さらには、前節の私の記述だけでは国方氏自身を十分には紹介しきれていない恐れもあるので、この文章で補完していただけることも期待しているからである。

『ひとりから』は原田奈翁雄さんが編集している雑誌です。

原田さんは筑摩書房が発行していた文芸誌『展望』の編集長を臼井吉見氏のあとをついで編集されていました。87歳です。

『展望』は1978年に終刊になりましたが、初期には太宰治の「ヴィヨンの妻」や「人間失格」、大岡昇平の「野火」などを掲載した雑誌でもあります。原田さんはその後『怪書房』を創設して「ちびくろサンボ絶版を考える」とか「長崎市長への730通の手紙」という本や、林竹二氏の『教育亡国』などの教育書、またご自身の自伝的往復書簡「死ぬことしか知らなかったボクたち」「どう生きる、日本人」という本を出しておられます。

『怪書房』を退いてから連れ合いである金住典子さんとお「ふたり」で<sup>2)</sup>『ひとりから』を創刊しました。この号で55号（現在は年2回発行）になります。一貫して昭和天皇の戦争責任、戦後史のあり方を追求してきました。

1994年（平成6年）アメリカのスミソニアンミュージアムで予定されていた「原爆展」が中止される問題をめぐって日本中に批判的言論が起きたとき（私は60歳）、私は生徒たちのこの問題への批判や意見をまとめた文集を出し、たまたまそれが原田さんの目に

2) 金住典子「ようやく常識になる立憲民主主義」（本誌「エッセイ 主宰者革命」）の中に、「個人誌『ひとりから』は、私の連れ合いと1999年3月に創刊したものです。」（p. 67）とある。

とまって手紙をいただきつながりができました。直接お会いしたのは湯布院で行われた「自前の生き方を考える全国集会」です。

この号掲載の『ぼくの教育論』は3年前に冊子の形で約300人の卒業生に送ったものです。この文章に対する大阪の大学生の発言を加えて『ひとりから』が取り上げてくれました。原稿料(400字1200円)の代わりに55冊が送られてきました。雑誌を広めたい主宰者の意向のようです。

「教育論」を3年前に読んでいただいた方もおられますが、再度読んでいただけたらとお送りしています。(2014・6)

### Ⅲ 原田奈翁雄氏からの「大阪経済大生たちの体験的意見」へのコメント

前節での国方氏による『ひとりから』誌の紹介にあるように、雑誌はもともと原田奈翁雄氏の編集で始まったという。私が実際に書店で手にした、原田奈翁雄氏の編集されていた『展望』は、さすがに国方氏の紹介にあるような「太宰治の『ヴィヨンの妻』や『人間失格』、大岡昇平の『野火』など」の時代ではなかったが、私の大学生・大学院生時代の必読文献でもあった。そして、「ちびくろサンボ絶版を考える」は、私(たち)が会(図書館を考える会・学術情報システムを考える会→巨大情報システムを考える会)として関わったこともあるので、繋がっていたのだなあ、と灌漑深い。といって、ここで安易な灌漑に浸っている場合ではないのが今の時代である。これについては、私の「興味・関心の問題と社会のありよう」(『大阪経大論集』本号)で論じているので参照されたい。

さて、その原田氏が、第55号頒布に当たっての挨拶文(二〇一四年六月一〇日付)の終わりに、わざわざ次のように「大阪経済大生たちの体験的意見」へのコメントを書いておられる。私はおおいに感激したし、若い学生たちにも読んでもらいたい――、

今度の号で、そんな私〔原田氏はこの挨拶文冒頭から安倍政権を支持する「日本人とは、何と情けない人間どもだろう」<sup>3)</sup>と嘆かれている――池野注記〕に救われるような思いをさせてくれたのが、国方勲さんの「ぼくの教育論――学校とは何か」を読んだ大阪の大学生たちの反応――「大学生は考える」(一七六ページ)でした。

若い人たちの中の大勢に、ほんとうのことを求める、こんなにも豊かな感情と、考える力が、実にたのもしく健康に育っている。国方さんの教師としての体験を語る良き魂のことばが、教育の当事者である彼らの中の同じくよき魂を呼び起こし、誘い出していることが、まことに貴重なことに思われて、希望は決して虚妄ではないと、胸が熱くなるのでした。

読者のみなさんには、ぜひ見逃すことなくお読みいただきたいと思って、この文章を

---

3)「安倍政権を支持する『日本人』」については、内山節「変革の時代に生きる」(『世界』2014年9月号)が、とりわけ私たち団塊の世代であるとして鋭く批判している。詳しくは、前掲「興味・関心の問題と社会のありよう」で取り上げているので参照されたい。

書きました。

こんなエールを送ってもらって、このしんどい時代にあって学生たちも少しは元気が出ることだろう。

#### Ⅳ 国方さんの教育論に関連して

以下では、国方さんをいっそう力づけるような最近の論稿をいくつか紹介してみよう。

まずは、後述するように、『ひとりから』誌にも名前が出てくる、佐々木賢氏の最近のもの（「教育商品化の現在」『現代思想』2014年4月号）である――

欠席が多いので家庭訪問したら、住んでいる筈のアパートに誰もいない。近所の人が「家賃を滞納し夜逃げしたらしい」と言う……。教師が当てもなく街を歩いていると、定時制高校一年の生徒が小学校五年生の妹の手を引いているのに出逢った。父母は離婚し行方知れずで、兄妹はコンビニで弁当を恵んでもらい街を彷徨っていた。教師は児童相談所に掛け合い、施設に入れる手続きをした。そのため丸一日分の授業ができなかった。教頭は許可してくれたが、他の生徒は教室で騒いでいた。……この教師が「授業放棄」「職務怠慢」と評価されても文句が言えない。

人は助け合いながら生きている。愛情や親切さや人としての大切なテーマが逆評価される。教育再生会議は底辺校の教師を競争原理で評価し、愛情や誠実さを評価する気がさらさらない。人間に関わるのが、教育行政は苦手なのだ。

そして、志水宏吉・伊佐夏実・知念渉・芝野淳一『調査報告 「学力格差」の実態』（岩波ブックレット 2014年）である。同書は、「当初、私たち研究チームは、今回の調査では子どもたちの学力格差の実態がより深刻になるかもしれないという懸念を有していた。なぜならば、私たちの調査が対象としている地域・学校は、日本の中では社会経済的にややきびしい環境にあると考えられるところであり、二〇〇〇年代以降の格差社会化の進行の中で、子どもたちの生活実態はきびしさを増しているという印象を有していたからである。さらに、二〇〇〇年代に入ってから日本の教育政策はどちらかというと競争主義・成果主義を旨とする新自由主義的な色彩を強く有しており、社会的な平等や公正をめざす視点はうすいと、私たちは判断していた。橋下徹氏の強いリーダーシップのもとで新自由主義的教育改革が推進されてきた大阪では、子どもたちの学力格差はより先鋭的なものになると心配していたのである。／しかしながら、私たちの不安は杞憂に過ぎなかった。……家庭環境の影響力は相対的に弱まり<sup>4)</sup>、逆に『学校の力』がクローズアップされる結果となった」（pp. 64～65）と、新自由主義的教育改革がもたらすはずの悲惨な事態に陥らずに済

4) 後述するように、同書が言っているのは、あくまでも「家庭環境の影響力は相対的に弱ま」（傍点――池野）ったということであり、矢野眞和「教育家族の逆説」（『現代思想』2014年4月号）が指摘するように、「わが国の特徴は、子どもの教育は親の責任と考えるイデオロギーにある。情緒的

んでいる、と報告している。

が、この調査報告の真髄は、単純な「学校の力」の賞賛にあるのではない。曰く、「無前提に『がんばっている』学校を賞揚することは危険でもある。というのも、『しんどい学校』の存在が象徴するように、『がんばっても成果が出ない』ほどにきびしい環境に置かれた公立学校も確かに存在するからだ。また、『がんばっている学校』の教師たちの努力は並大抵のものではないだろう。とはいえ、これらの事実は学校の力を否定するものではなく、むしろ学校のがんばりを支える制度や政策の重要性を訴えるものである。そうした学校の力が発揮されるような条件整備がきちんとなされたとき……『高い効果』を継続的に発揮できる学校が生まれるのだろう。」(p. 62)・「『学校の力』が発揮されないのは、多くの場合、それを無化してしまうような制度的・政策的制約があるからだと考えられる。学校・教師のがんばりは、正当に評価されなければならない」(p. 66)。そして、「学校の力が発揮されるような条件整備」とは、けっして教師の間に競争を持ち込み査定を行なうことではないし、格差や管理強化を持ち込むことでもない。逆に、それらこそ「学校・教師のがんばり」を「無化してしまうような制度的・政策的制約」をもたらすものであり、新自由主義的教育改革なのである。

この点について、青砥恭「『居場所としての学校』から飛び出して」(『現代思想』同上)は、次のように実態を報告している――

実は、大阪は教育行政としてもかなり一生懸命やってきたところで、いわゆる底辺校にそれなりに教員を配置するといった努力はされています。また、サポートステーションから職員を入れて、就労支援をしたりしているのです。地域の人々との連携もおこなわれています。それを橋下さんはどんどんつぶしていますね。

橋下大阪府知事時代に決定されたことは、校長さんを民間から登用するとか、どちらかといえば教育の中身の問題ではないですね。あるいは教員の評価制度を導入したりとか。……橋下氏には地域の人が自ら変革の主体といった発想がない。

また、「『アベ暴走教育改革は数にまかせて、『教育の危機』を妄想し、学校現場や子育て現場は混乱疲弊破壊崩落へ突き進んでいる。その特徴を私なりに整理して、現場の学校を臨場してみたい」という、岡崎勝「『俺のとは違うなあ』――学校に臨場すれば見える『アベ暴走教育改革』のアウト！」(『現代思想』同上)は、「アベ暴走教育改革」の特徴として、「競争原理を原則にして社会を組み立て、『競争ですべてが良くなる』という安直なイデオロギーを注入して、いっそう差別や排除をすすめる子どもや教員、親を疲弊させてい

---

な責任だけでなく、経済的責任を負っているところが凄い。私立大学の高い授業料を負担するのは、親の責任だと考えている。教育に対する『意志』と『責任』の二つをあわせ持つ意味を込めて教育家族と呼ぶことにする。……教育家族に恵まれない子どもたちの進学機会は大きく疎外される。教育家族は教育貧困家族と表裏一体。家族の貧困が教育の貧困を生む構造になっている」こと自体はなんら変わってはいないことに注意しなければならない。

く。」「第三者などの学校評価、教員評価によって、出来不出来を決めようとしている。あたかも数値評価したり、順位をつけたりすればうまくいく、あるいはみんなが頑張ると『誤認』し、それを知っていて確信犯的に改革をすすめている。」などを挙げ、それらを「学校の現場」から具体的に論じていて説得力がある。そのなかで、やはり大阪橋下「改革」を次のように断じている——「住民の学校へのバッシング<sup>5)</sup>を行政が利用するということは、橋下大阪市長がよくやる手である。『親が文句を言っている』と言って学校を視察し、あら探しをして攻撃し、自分と相容れない学校関係者を排除するというあざとい戦略だ。学校バッシングで煽られた地域住民や保護者は学校の味方にはなってくれない。」

これらは、今日の逆風のなかで国方さんの教育実践や橋下行政への批判を支持するものである。あわせて読んでほしい。とりわけ、国方さんの実践などに対して批判的な意見（『ひとりから』誌に掲載された学生たちの「教育条例に賛成の意見」）に共感してしまう学生たちの存在が厳としてあるので、なんとしても紹介しておきたかった。

いろんな意見があつていい。が、それが多数派——権力者にとって都合がいい意見——なのではないのか。少なくともそれだけは自覚してほしいのである。その上での発言であつてほしい。

## V 青木悦「フクシマを伝えること」

『ひとりから』誌は多くの人たちの投稿から成り立っているが、そこで見たのは、私には懐かしい名前のオンパレードであった。もちろん、書かれたものを通しての私の一方的な「知り合い」ではあるのだが。たとえば、もろさわようこ<sup>6)</sup>、尾形憲<sup>7)</sup>（文章に「九〇歳になりました。」とあつて驚いた）、佐々木賢<sup>8)</sup>、青木悦<sup>9)</sup>、などなど。若い赤木智弘<sup>10)</sup>の名

5) 岡崎氏は、昨今の評価ばかりについて次のように警告している——「教員評価制度や学校評価は、今まで一方的に学校の裁断を受け入れるしかなかった親たちが、『今度はこちらから裁断してやる』という気分を味わえるチャンスとばかり、『アベ暴走教育改革』に同調するだろう。しかし、教員を評価している校長や教委は傷つかないかもしれないが、親はそれが、次には自分たちと子どもの首をしめることに気づいていない。……／実際に、学校評価がかなり適当な選択肢で、適当に実施されているからまだいいが、これを精緻にやればやるほど、今度は『まあまあと評価されている学校に適応できない』子どもや、躓いている子どもが『配慮』という名の下に『排除』『選別』の対象になるかもしれない。／教員自身は教員を評価する制度など『無駄』だと分かっている。しかし、悲惨なのは『正しく評価して欲しい』と言い出すときだ。子どもを『正しく評価評価などできるはずがない』ことを知っている教員だけが『希望』なのだ。」

6) 以下には、若い読者たちには聞いたこともない名前が続くだろうから、若干の説明をしておこう。もろさわようこ（1925年生まれ）は、女性史研究家。

7) 『学歴信仰社会』（時事通信社、1976年）、『素顔の学生たち——学びとの出会い』（青木店、1983年）、『新しい教育の原理——いま学ぶことの意味を問う』共著（ミネルヴァ書房、1986年）などの著書がある。

8) 『怠学の研究——新資格社会と若者たち』（三一書房 1991年）、『資格を取る前に読む本』（三一新書 1996年）、『教育と格差社会』（青土社 2007年）などの著書がある。

9) 『「人間」をさがす旅——横浜の「浮浪者」と少年たち』（民衆社 1984年）や『やっと見えてきた

もある。それらすべてをここで紹介できないので、いくつかを取り出してみる。

まずは、青木悦「フクシマを伝えること」から。「福島市出身の男と結婚して38年ですから、その間もずっと……東京から帰ってきました」が、「いまのように一年間ずっとここで生活するようになってまだ三年目」、ともかく福島に「大震災以後に『帰って』きた」青木氏は、「若いころからのやりたかったこと」＝庭作りを始めながら、教育ジャーナリストとして講演に「東京、神奈川、名古屋、大阪、滋賀、鳥取、徳島など、次々と出かけ……冒頭に必ず福島のことをしゃべります。」が、青木氏は次のように書いている――

ただ、この福島の話が、みんな、たいくつそうなのです。教育関係の話だと思って来る人たちが多いので、当然といえば当然ですが、はじめはつきあい(?)で聞いてくれていた人がどんどん“たいくつ”を表現するようになっていきました。露骨にあくびをする人もいて、私はとまどいました。今まではあまり見なかった光景でした。

そのうちわかりました。……多くの人が、もうフクシマに飽きているんだ、と気がついたのです。福島に住んでいる私たちは、地元紙がいつもトップで書く、原発の高濃度放射性汚染水もれなど、胸をドキドキさせて読みます。去年の夏〇〇トンもれていたことがわかった、などのニュースにはもちろん怒ります。神経質になっていた時期私は、原子炉の中に鉄製の工具を落としたなんてニュースにも眠れなくなりました。全く収束していないどころかどんどん増える冷却後の汚染水の行き場がなくてオロオロしているとしか思えない原発の作業の様子に、恐怖を背負って関心を抱きます。抱かざるをえないなりに生きているのです。

しかし他の土地に住む人たちのなかに、原発はフクシマに閉じ込めて「終わった」と思っている人が多いのだと思いました。そういう人たちに「フクシマは終わっていません。帰れない人たちが六万人もいます。子どもの甲状腺ガンは増えているのか、増えていないのか、よくわかりませんが、不安です」などの話は、いま、もうしんどい話になってしまっているのだと、気がつきました。

こうして、「どうやったら伝わるのか、考えました。伝えなければならないことだから、あきらめるわけにはいきません。だって福島に帰ってきた以上、念願の庭作り以上にしなければならないと思っていたことは、この地のことを広く伝えることだったのです。」と

---

子どもたち――横浜「浮浪者」襲撃事件を追って』（あすなろ書房 1985年）などの著書がある。当時の横浜での「浮浪者」襲撃事件はあまりにショックで、大阪から横浜まで私は連れ合いと抗議のデモにでかけた。そのときのマスコミは襲撃した少年たちのことを平然と「欠損家庭」と表現していて、当事者でもあった私の怒りが増幅された。

- 10) 高校卒業後にコンビニ・アルバイト生活をしていて、月刊『論座』掲載の「希望は戦争 『丸山正男』をひっぱたきたい」で一躍有名になった。なお、赤木氏については、その論考「牛井福祉論の発生とその現実――若者を見殺しにする国に生きて（連載12）」を前掲「興味・関心の問題と社会のありよう」で詳しく取り上げているので参照されたい。

いう青木氏は、短歌という形式を使う工夫を思いつき、それに手応えを感じたという。

たしかに、学生たちと話していてもフクシマはまったく関心の外にあるようだ。ただ、昨年まではフクシマからのゼミ生がいて、彼の話のはしばしにフクシマがあったので、ゼミ生たちもどこかで心に留めていたようであった。

それにしても、である。伝える側がなぜこんなに努力をしなければならないのか。これは、前掲別稿で私が論じている「興味」「関心」の問題であり、当事者性の問題である。

ちなみに、藍原寛子「鮫川村仮設焼却炉 放射性セシウムを大気中に25%放出」（『ビッグイシュー』2014年8月15日号）は、「環境省の鮫川村仮設焼却炉試験結果報告書では、放射性セシウムの回収率は75%に止まり、25%は大気中に出たことがわかった。環境省が『99%以上回収できる』と住民に説明した内容とはかけ離れている」こと、「微粒子になればなるほど表面積が広がるため付着する放射性セシウムの総量が増える危険性があるのに、放射性セシウムの環境基準や大気排出の総量規制を検討していないこと」などを報告している。また、『DAYS JAPAN』（発行人・編集人 広河隆一 株式会社デイズ ジャパン発行）2014年8月号は、「福島県二本松市 学校と通学路、子どもが集まる場所 実測・放射能汚染地図」と「母親たちへのアンケート調査」（別冊特集『福島之母440人の証言』）を特集している。

## VI 宮永捷「山代巴と私」

牧原憲雄編『山代巴 獄中手記書簡集』を出版した而立書房社長である宮永氏の「余談」が、とりわけ私には刺激的であった。たとえば、「権力を持つ者から権力を奪うには、彼ら以上の狡さが必要だと思えます。『嘘をつかない』ということは支配する側にとって都合の良いことであって、支配される側には不利なことです。」という宮永氏だからこそ、次のような体験を書けるのである――

私たちは就学前では親から、就学してからは学校教育の場で、繰り返し「嘘をつくな」「正直であれ」と言われてきました。私が而立書房という会社をつくって知ったことは、人が嘘をつく時はやむをえない時がほとんどだということでした。そのときは、それに対応するこちら側に用意ができていれば大概のことは無事にやり過ごすことができました。むしろ、社に出入りする印刷・製本・紙屋さんなどの営業の人たちにすべてを任せっていると、非常に真剣に私の仕事を手伝ってくださいました。私が一人で四十年余会社を経営できたのはその人たちのお蔭でした。

どう育ったのか、私の子供は嘘に対して強力な拒否反応を示すのです。「自分は嘘をつかない」という自負が強いと、他人に対して不寛容になるようです。

あるいは、宮永氏が一九七〇年に辞めた勁草書房時代に組合を組織する――「組合を組織したのは『建国記念の日』が最初に施行された年でした。その年の二月十一日、私が抗議の出勤をしていましたとき、営業部の二人の仲間から相談を受けました。」――のだが、

「このとき取り交わした労働協約は時間をかけて練り上げたものですから、日本では、あるいは世界でも類のないもの」と自負する――

賃金については、年齢給と経験給（会社に在籍している年数）のみにしました。……受付であろうと編集であろうと、会社においてその部門が必要ならば同じであるべきだというのが、私の考えです。

私たちの賃金体系は一見、古いものに思えるでしょうが、会社側からの査定の余地を残さないためには、これが最高だと思いました。

当時、最強と言われていた岩波書店には能率給がありました。また現在、日本の会社のほとんどが採用している職務給は、一見若い人には良いようにみえますが、四十代五十代の賃金が抑えられ、全体としては人件費の大幅削減となっています。

そして、「受付であろうと編集であろうと」賃金は同じと考える宮永氏の考えからすれば、「毛沢東の下方運動」の評価は、次のように高いものとなるのは必然である――

毛沢東はおそらく、革命を指導した人たちが支配層を形成し、その子供たちがそのまま親たちの享受した利益を受け継ぎ、特権階層をつくることを危惧したものと思われる。それで、その子弟たちを改革の現場に戻し、再教育することを目指した……

阿部彩「子どもの貧困投資のリターン」（『週刊東洋経済』2014年7月19日号）によれば、「学力は親の社会経済階層によって決まる度合いが高く、子どもの学習時間などの努力によって学力格差が縮小される度合いは限定的である……小学6年生の学力テストにおいて、社会経済階層の下位4分の1の児童生徒が3時間以上勉強して獲得する学力の平均値は、社会経済階層の上位4分の1でまったく勉強しない児童生徒の平均値よりも低い」のだから、社会階層の固定化を避けようとした毛沢東の下方運動は大きな意味をもつ。

なお、この下方運動（「上山下郷」運動）とは、若い人たちにとっては馴染みのないものであろうが、毛沢東の「知識青年が農村に入って貧農下層中農の再教育を受けるのはおおいに必要なことである」（一九六八年十二月二十二日人民日報）という呼びかけが、きっかけとなった。この下方運動をはじめとする文化大革命については、今日ではほとんどが否定的評価である。当時であっても、当然ながら否定的な人たちがいた。中国国内では、たとえば、夏之炎『絶対零度下の鋼』（プレジデント社 1979年）はその「あとがき」で次のように書いている――「二十数年来……さまざまな知識人はすべて闘争と改造の対象となって……／たしかに、改造を必要とする悪質な知識人もいます。しかし、それはごく僅かです。大部分の知識人は祖国を愛し、人民を愛し、社会主義を愛する心を持ち、仕事にはげんでおります。／しかし、少数の心ない気違いじみた指導者の目には、すべての知識人は自分たちの愚民政策を見抜き、それに反対するように見えるのでしょう。そこで公然とこういうのです。『知識人は消してしまわなければならない』――と。／闘争、労働

改造、下方という“圧迫”のほかに、彼らは仕事を与えられず、本を読んだり学習することも許されません。専門技術や知識を忘れさせ、彼らをただ生きるに忙しいだけの廃人同様の人間にしてみようということです。」（pp. 231～232）

これに対して、岸陽子「大地を駆けぬけた作家たち」（陳健功『棺を蓋いて』『新しい中国文学』第1巻 岸陽子・斎藤泰治訳 早稲田大学出版部 1993年）が紹介する「知識青年作家」と呼ばれる一群の作家たちのなかのひとり、張承志<sup>チャンチョンチー</sup>の証言（『紅衛兵の証言』岩波新書）は別の評価をしている——「六〇年代の中国はすでに大爆発の潜在的条件を備えていた。多くの中国人が望んでいたのは一つのことだった。つまり雲の上で威張り返っている官僚の頭を下げさせ、不公平極まる特権をおちこわし、皇帝を馬からひきずりおろすことだった」・「農村や草原で、じかに底辺の人びとの苦しい生涯は、知識青年たち一人ひとりに根本的な生き方の変更を迫った」。また、同世代に属するひとりである女性作家、張抗抗<sup>チャンカンカン</sup>がその小説の中の登場人物に語らせているところも同書において紹介されている——「今の人はみんながだまされたとはいえるが、だまされたとはいええすれば万事大吉というわけだ……だが僕が北大荒に身を投じたのは、心からそうしたいと願ってみずから志願したのだ」。

じつは、私（たち）の学生時代にあってプロレタリア文化大革命は自分たちの知識・文化というものがいったいどこに向かっているのか、何を犠牲にして成り立っているのか、といった根源的な問いかけを突きつけた点で天地を引っくり返すほどの衝撃であった。たとえば、一九六六年十一月号『文藝春秋』ですら、小島直記「重役も私用にはバスに乗れ」や池田彌三郎「“大臣”という名称を廃止せよ」などといった＜特集＞「われ日本の紅衛兵となりて」を組んでいるほどに影響力があったのである。

しかし、改革開放経済に舵取りをした中国にあってももちろん、また、グローバリズムのなかで生き残りを賭けた先進諸国にあっても、そうした問いかけは顧みられることがなくなってしまった。ただ、グローバリズムの行き詰まりが明らかになりつつある今日にあっては、こうした根源的な問いかけを再検討すべきだと言える。それゆえに、たとえば、E. F. シューマッハ<sup>ラディカル</sup>『宴のあとの経済学』（長州一二監訳、伊藤拓一訳 ちくま学芸文庫 2011年）は、根源的<sup>11)</sup>で刺激的なものとして毛沢東の次のような考えを紹介する——

毛沢東や周恩来という非凡の能力と人格の持ち主が、新社会の建設者として現われた。経済学を専門とする者としていえば、彼らは経済原理を引っくり返したことになる。ヨーロッパの経済学の立場では、「よそから、もっと安い価格で手に入れることができない」という点がはっきりするまで、何に手をつけてもいけない、何を生産してもいけない」

11) ここで「根源的」というのは、シューマッハの次のような「本来最も意識が鋭敏なはずなのに」現実的（＝逃避的）な「インテリ」批判に関わってのことである——「世のインテリとなると、本来最も意識が鋭敏なはずなのに、いざというときに逡巡する。とまどったあげくのインテリは妙な質問をしてくる。……『結構なお説のようだが、現実問題としてシステムがそれを許さないでしょうな』という人もいる。」（同書 p. 143）

ということになる。

いつかプエルトリコを訪ねた時のこと、あの豊潤な島がわざわざテキサスからエンジンを輸入していることを聞かされた。テキサスでエンジンが安く生産できる以上、プエルトリコでは生産してはいけないというわけだ。これが、われわれの社会というものだが、それを中国は引っくり返して、こういつている。

「自分では生産できない、という点が完全にはっきりするまで、よそから何も買ってはいけない」。

事は至極簡単だ。「もっと安い価格で買えないことがはっきりするまで、何も生産してはならぬ」などといっているようでは、開発のほうが足止めを食ってしまう。だが、「実際に君が生産できなければともかく、そうでなければ、よそから買ってはならない」という立場をとれば、経済学の観点からみると、みなが課題を与えられて仕事にいそしむことになる。

もう一つ、中国が明らかにした大切なことがある。それは若者を一人、一年間大学で勉強させると、ちょうど農民一人が三〇年間働いて得るだけのカネを食うということである。だから大学に五年在学すれば、一五〇年働かなければ手にできないほどのカネを使うわけだ。そこで毛沢東としては、「諸君にこれだけのことをしてくれた農民は、いったい何を手にするのか。所詮、わが国は巨大な農村社会である。君たちは農民の犠牲のうで勉強させてもらっているものであり、すでに農民一人が一五〇年かかってようやく手にできるほどのカネを消費したことになるのだ。華美な上海などには行かないで、辺地の農村まで出かけて、君たちの勉強した何ものかを農民諸君に残してくれ給え」と説いた。

農村に出向いた学生たちは、自分たちが農民に与えるべき何ものももっていないことを悟った。身につけたものすべては、まったく役に立たぬものばかりだった。赤ん坊の体重を測ろうにも、村の全所得を合わせたよりももっと高価な乳児用秤がなければお手上げの状態だった。その彼らが農村から引き上げて来ると、「大学では、実際に役立つものを何一つ学習していない」といい出した（これによって、大学の教科内容は大きな影響を受けることになった）。

学生たちは、その次の段階に進んで、「ぼくらは労働と学習を結びつけなければならない」というようになった。二本足で歩めという、いかにも中国らしい思想である。ある一定の学習期間のあとで一定の労働期間を設ける。実際の肉体労働は身分不相応だ、などという人間は一人もいない。われわれは、すべての人間に現実をみせなければならない。でなければ、彼らは現実について何一つ知らず、ただ知っているのは書物に書かれていることだけ、ということになってしまう。そして、中国のいたるところで人びとが要求したのは、小規模な技術と経験であった。

pp. 134~136

ただ、教員として一九七五年以来（！）四十年間もその座にいた私がこう言うのもまったく迫力がないのだが、じつは、毛沢東自身もまた自分を下方すべきでもあった<sup>12)</sup>。だが

ら、宮永氏は続いて、次のように「第二革命」の必要性を説く――，

資本主義が今もって健在なのは、たえず弱者を創りだし、その人たち、または弱い国を犠牲にして生き延びているからだと思います。社会主義の難しさは、資本主義が切り捨てる人たちを一行に救済しようという負担が大きいからだだと思います。

私の次男は学校の勉強があまりできない子でした。その彼は学校で試験があるたびに、「だれそれは何点だった」と自分の点数より低い人のことを言いました。おそらく、自分より悪いものが居ることで安心したかったのでしょう。自分より成績の悪いもの、弱いものをつくり出さないと安心できなのでしょう。この意識を改革することが第二革命だと、私は思います。

## Ⅶ 「九条にノーベル平和賞を」

ひとりの若い母親（神奈川県の大井直美さん）の始めたこの運動が、ついにノーベル平和賞候補278のひとつにノミネートされたという。実行委員会からの経過報告が紹介されている。

しんどい時代だからこそ、多方面からのアプローチがありうる。

## Ⅷ お わ り に

最後に、国方さんの文章をきっかけにして、学生たちと一緒にのやりとりを再度可能にしてくれた『ひとりから』誌に、あらためて感謝を表したい。そして、なによりもそれを可能にしてくれた学生たちに。

そこで、私が国方さんに送ることになった感想レポートのなかから、ひとりの学生の感想を紹介して本稿を終えよう――，

読んで思ったのは乱暴な改革が行われようとしていることへの驚きです。私の橋下知事〔当時――池野注〕へのイメージはカリスマ性のあるすごい人で正しいことをしよう

12) ちなみに、竹内好「新中国を生み出したもの」（『竹内好全集』第4巻 筑摩書房 1980年）は、「中国革命の歴史的意味」（p. 183）のポイントの一つとして「生産と労働の尊重」（p. 189）を挙げ、「戦争中に解放地区でひどい飢饉があり、すべての政府職員は必ず一日一定時間、労働しなければならぬということが実施されました。生産尊重といっても口先ではだめで、指導者が率先して範を垂れなければならぬということで、もちろん毛沢東もやった」と指摘している。そして、その後に以下のように続ける――「日本では労働者や百姓よりも会社員がえらいという気持ちがまだまだ強い。中国でも昔はその通りだったのです。物をつくらなければ人間は一日として生きて行くことができない。権力者、支配者は生産者の労働によって養われているわけです。だから彼らは労働から解放され、権力を握ることによって労働者を搾取します。だから文化は支配者に握られ、支配者の観念で文化がつくられます。そのために、労働をしないで権力を握り、人の労働の果実を奪った方がえらいという観念が植え付けられ、身体にしみ込んでいます。そういう観念を抜きさって、労働こそ人間にとって必要な、価値の源泉だという考え方に徹底しなくてはいけない」（p. 190）。

としている人というものだった。先生が管理的に締め付けられたら、この仕事に自分の生涯を賭けようとする若い人がいなくなってしまう。私は中学のとき不登校になりかけた。それを救ったのは私を気にかけて何度も家まで説得に訪れた先生がいたからだった。先生にこういうことをする余裕がなくなりはないか。